

# 「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の 成立と崩壊

—1918年のもう一つの南スラヴ人統一国家について—

材 木 和 雄

## 1 はじめに

ユーゴスラヴィアとは「南スラヴ人の国」を意味する。このユーゴスラヴィアが国家としての歩みを始めたのは、通説では、1918年12月1日のことである。この日は、セルビアの首都ベオグラードで「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国が宣言された日にあたる。この国家は1929年にユーゴスラヴィア王国と名称を変更した。それは第二次世界大戦中に崩壊したものの、戦後にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国に生まれ変わった。このユーゴスラヴィアも、1990年代初め、4つの構成共和国が分離独立することによって解体し、1992年にユーゴスラヴィアはセルビアとモンテネグロだけによって構成される国家となった。

だが、以上の歴史に先立って、もう一つの南スラヴ人の国家がこの地域に存在した。「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」という名の国家である。それは、オーストリア＝ハンガリーに属していた南スラヴ人の諸地域が第一次世界大戦末期に分離独立を宣言して形成した国家である。この国家が1918年12月1日にセルビア王国と合体して誕生した国家が「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」である。二つの国家はいずれも文献上SHSと略して記されるのでまぎらわしいが、両者はまったく別物である。

もともと、ユーゴスラヴィアという南スラヴ人の合同国家は、19世紀の後半にクロアチアの一部の知識人が構想したハプスブルク帝国再編のアイデアであった。それは南スラヴ統一主義（ユーゴスラヴィア主義）とも呼

ばれる。クロアチアの有力な政治指導者であり、南スラヴ統一主義のイデオログであったヨシプ・シュトロスマイエル司教（1815－1905）は、スロヴェニア、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチア、ヴォイヴォディナといった帝国内の南スラヴ人諸地域を一つの自治単位に統合し、これがオーストリアおよびハンガリーと同等の国家的地位を獲得することによって、ハプスブルク帝国が三重王国あるいは連邦制国家に再編されることを望んだ。彼は、最終目標として、帝国外の南スラヴ人国家、とくにセルビアとの統合を視野においてはいたが、当面の目標はあくまで帝国内の南スラヴ人諸地域の統合と自治権の獲得であった。

これに対して、セルビア人は、バルカン諸民族の間では最初に独立闘争を始めた勇猛果敢さで知られる民族である。彼らは、トルコの支配に対してたびたび蜂起や反乱を試み、セルビア民族国家の領土的拡大のために数々の戦争を戦い抜いてきた。こうした戦いの成果として、セルビアは1830年に自治公国の地位を獲得し、1878年には完全独立を達成した。とくに1912年と1913年の二次にわたるバルカン戦争では、セルビアは軍事的に大勝利を収めて領土を倍増させ、バルカンの強国として頭角を現した。オーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人の中にはセルビアの躍進に狂喜し、南スラヴ人解放の旗手としての期待を寄せる者も出現し始めた。

第一次世界大戦中には、劣勢にあったセルビア政府は、ニーシュ宣言を発表して、全南スラヴ人の解放と統一国家の樹立を戦争目的に掲げたが、これは主としてオーストリア＝ハンガリー帝国軍に所属して戦争に参加している同胞の南スラヴ人の戦意をそぐ戦術であった。セルビアの政治指導者にとって最大の関心事は、オーストリア＝ハンガリー帝国のセルビア人居住地域を併合し、セルビア民族国家の領土を拡大することであり、クロアチア人やスロヴェニア人を対等なパートナーと認めて合同国家を建設することではなかった。したがって、同じく南スラヴ人の統一国家といっても、クロアチアとセルビアの政治指導者は伝統的に大きく構想を異にしていた<sup>1</sup>。

1918年10月29日に独立宣言をおこなった「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」はクロアチアの知識人の一部が温めてきた南スラヴ統一主義構想が実現したものであった。ところが、この最初の南スラヴ人の統一国家はわずか一ヶ月後に「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」に吸収され、消滅した。それは、私見によれば、シュトロスマイエル的なユーゴスラヴィアが拡大セルビア的なユーゴスラヴィアに転換する最初のステップであった。

この国家は短命に終わったために、ユーゴスラヴィアの歴史を扱った文献のほとんどは、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」を過渡期の臨時国家として簡単な記述ですませている。通史書のなかには名称の記述のないものもある。たとえば、スティーブン・クリソルド (Stephen Clissold) が編集した *A Short History of Yugoslavia: From Early Times to 1966*, Cambridge: The University Press, 1966 は英文の通史書として定評があり、我が国でも翻訳されてユーゴスラヴィアの研究者の必読文献になっている (田中一生・柴宜弘・高田敏明共訳『ユーゴスラヴィア史』恒文社、1980年)。しかし、そこでは、第一次世界大戦末期に成立したハプスブルク帝国内の南スラヴ人の臨時政府について、「1918年10月29日にクロアチア議会が開かれ、ハンガリーとの連合が終息すべきことを宣言し、フィウメの管理を引き受け、あたらしい国家の最高権力を民族会議に委譲し」<sup>2</sup>たことがさらりと述べられているだけである。この国家が「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」であることにはふれられていない<sup>3</sup>。察するに「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」と読者が混同すること避ける意図があったのかもしれない。

しかし、その後この地域で起こった深刻な民族対立の起源や争点を知ろうとするとき、この国家の成立と崩壊の事情の検討は避けて通れない作業である。なぜなら、第一次世界大戦後の混乱を背景に、国家の形態や内部構造について国民的なコンセンサスを形成することなく、南スラヴ人の政治エリートが統合国家を性急に発足させたことこそがユーゴスラヴィア

を構成した諸民族の対立の出発点になったからである。もちろん、このことについては多くの説明が必要である。その一つの作業として、本稿ではユーゴスラヴィアとは何であったのかという問題を念頭に置きつつ、その発足時の背景や経過を明らかにしたい。それは、いいかえると、1918年に存在したもう一つの南スラヴ人統一国家である「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の成立と崩壊の過程を検証することである。

## 2 オーストリア＝ハンガリーの崩壊と諸民族の独立

第一次世界大戦は、オーストリア＝ハンガリーがセルビアに対して宣戦布告することをきっかけに始まったが、連合国にとって最大の戦争目的はドイツの打倒と占領された領土の奪還であった。ドイツとオーストリア＝ハンガリーが同盟関係を結んでいたからこそ連合国はオーストリア＝ハンガリーと戦っていたのであり、連合国側にとってそれ以外に戦いの理由はなかった。とりわけイギリスやフランスにとってはオーストリア＝ハンガリーは主たる敵国ではなかった。したがって、オーストリア＝ハンガリーの解体は連合国が求める講和条件ではなく、むしろ西欧列強間の勢力均衡を維持するために縮小規模での同国の存続は必要だと連合国の指導者は考えていた。

もっとも、1916年12月、当時なお中立を保っていたアメリカの大統領ウィルソンが二つの交戦陣営に戦争目的の明示を求めたとき、連合国の側はアメリカの理想主義と世論に訴えるため、「民族自決」の実現を取り上げ、「イタリア人、スラヴ人、ルーマニア人、チェコスロヴァキア人の外国支配からの解放」を戦争の大義名分の一つとした。ただし、その内容は曖昧で、連合国がハプスブルク帝国の解体と被支配民族の独立に言質を与えたということではなかった。一方、ドイツの衛星国のような地位に甘んじていたオーストリア＝ハンガリーはドイツ軍の支援で何とか戦線を維持していたが、その指導者の一部は、戦争の長期化による国力の衰退に帝国

崩壊の危機を感じていた。そのため、1916年11月の皇帝フランツ＝ヨーゼフの死を契機に、ウィーンの宮廷と政府は連合国との単独講和の道を密かに模索するようになった<sup>4</sup>。英仏両国政府もドイツを孤立させるねらいからこの秘密交渉に応じていた。

この交渉は1917年10月半ばに不調に終わった<sup>5</sup>。しかし、この直後にイタリアがカポレットの戦いで大敗し、ロシアで10月革命が起こるといふ事情もあって、連合国は再びオーストリア＝ハンガリーをドイツから引き離すことを試みた。アメリカ大統領ウィルソンはこの戦術の熱心な支持者であり、カール皇帝と極秘に文通を続けていた。1918年になっても連合国の指導者は、チェコ人や南スラヴ人亡命政治家による反ハプスブルク運動に対してなお慎重な姿勢を取り続けていた。1月5日にイギリス首相ロイド＝ジョージは「オーストリア＝ハンガリーの解体は我々の戦争目的ではない」と言明し、同月8日にウィルソン大統領が将来の講和の基礎として発表した「14カ条」の原則では「オーストリア＝ハンガリーの諸民族は自治的発展の最大限の可能性が与えられるべきである」(第10条)と述べられているにすぎなかった。

オーストリア＝ハンガリーに対する連合国の戦後構想が変わるのは1918年の半ばである。三つの要因がこれを促した。

第一にイタリアの態度の変化である。イタリア軍は、1917年10月のカポレットの戦いでドイツおよびオーストリア＝ハンガリー連合軍に大敗北を喫した<sup>6</sup>。戦線離脱に近い状態になったイタリアはこのあと、なりふり構わない戦術で態勢を立て直そうとした。連合国の中ではイタリア政府はオーストリア＝ハンガリーに妥協的態度で臨むことに強硬に反対した。その一方でイタリアは、敵軍中の南スラヴ人兵士を軟化させる意図もあって<sup>7</sup>、これまで反対してきた南スラヴ人の統一国家運動に対しても協調的態度を示し、その主要な運動組織であるユーゴスラヴィア委員会に非公式に接近した。

ユーゴスラヴィア委員会とは、第一次世界大戦中にオーストリア＝ハン

ガリーから政治亡命した一群のクロアチア人、スロヴェニア人、セルビア人が結成した政治組織である。彼らは、オーストリア＝ハンガリー支配下の南スラヴ人を解放し、セルビアおよびモンテネグロと統一国家をつくることを目的に連合国の間で情報宣伝活動をおこない、戦後の統一国家形成に大きく貢献した<sup>8</sup>。イタリア政府の意向を受けて、「オーストリア＝ハンガリー被抑圧民族委員会」代表のイタリア人トーレは、1918年3月、ユーゴスラヴィア委員会議長のアンテ・トルムビッチと協定を結び、南スラヴ人の統一国家建国構想を支持し、将来の国境を民族自決権に沿って友好的に決定することに合意した。さらに1918年4月、イタリア政府は「オーストリア＝ハンガリー被抑圧民族大会」のローマでの開催を認め、帝国内の反ハプスブルク勢力を支援する態度を示した。大会はオーストリア＝ハンガリー解体の必要性と帝国内諸民族の自決権を確認し、将来の国境を「民族の原則」、「民族自決権」ならびに「生活上の利益」に基づいて解決することなどを合意した（「ローマ協定」）<sup>9</sup>。

第二にロシアの戦線離脱に伴う戦況の変化である。1918年3月にロシアとブレスト＝リトフスク講和条約を結んだドイツは、広大な領土を獲得するとともに、ロシア戦線の戦力を西部戦線に移動させた。戦力を増強したドイツ軍は西部戦線で反攻に転じた。ドイツ軍は攻勢を強め、フランドル戦線を突破した。一方、ハプスブルク王朝の存続のために単独講和を考えていたカール皇帝はこのとき、自ら蒔いた種により窮地に陥っていた。講和を模索する目的で密かにフランス大統領に宛てた書簡がフランス首相のクレマンソーによって暴露されたからである<sup>10</sup>。そのうえ、ドイツ軍が反攻に成功したので、カール皇帝とその側近は大いに当惑した。結局、オーストリア＝ハンガリーの戦争指導者はドイツの軍事的勝利を信じて、帝国の運命を全面的にドイツに委ねる道を選択した<sup>11</sup>。それゆえ、この期に及んでオーストリア＝ハンガリーをドイツから引き離すことはもはや不可能になり、むしろドイツを倒すためにはオーストリア＝ハンガリーの解体もやむをえないと主要な連合国の指導者は考え始めた。

第三にオーストリア＝ハンガリー帝国内の社会不安の増大である。戦争の長期化によって帝国住民の窮乏は著しかった。ロシア戦線から帰還した戦争捕虜たちはボリシェヴィキの思想を持ち込んだ。民衆の厭戦気分は高まり、工場ではストライキが起き、社会主義運動も勢いを増した。軍隊の士気も低下し、各地の兵舎では集団的脱走が相次いだ。連合国が恐れたのは第二の十月革命が起きることであり、弱体化したハプスブルク帝国は帝政ロシアと同様に革命の動きを抑えきれないのではないかと思われた<sup>12</sup>。変革を求める民衆のエネルギーは、ロシア革命とは別の方向に吸収する必要があった。

1918年6月4日、対ソ干渉戦争の一翼を担わせるため、連合国はシベリアでソヴィエト軍と戦っていたチェコスロヴァキア人軍団を連合国陣營の交戦力と認めた。6月29日、フランスはこの軍団を指揮下におくチェコスロヴァキア国民評議会を将来の政府として承認した。このあと、他の連合国もチェコスロヴァキア国民評議会を正式に政府として承認し、帝国内被支配民族の国家形成を連合国が初めて約束した<sup>13</sup>。チェコスロヴァキアが独立することはハプスブルク帝国にとってはその心臓部の領土を切り取られることを意味した。こうして連合国はオーストリア＝ハンガリーの存続に見切りをつけた。

チェコスロヴァキア国家の創設を連合国が約束したことは、帝国内の南スラヴ人に大きな希望を与えた<sup>14</sup>。7月以降、南スラヴ人の解放と統一をめざして、「チェコスロヴァキア国民評議会」と同種の代表組織を作ろうとする動きが各地に広がった。最初に結成されたのはスプリットの「ダルマチア国民組織」であり、これに「クロアチア・プリモーリエおよびイストラ国民組織」が続いた。同様の動きはスロヴェニアに波及し、スロヴェニア諸地域の最高政府組織として「スロヴェニア国民評議会」がリュブリャナに設立された。クロアチアの中心であるザグレブでも諸政党の代表が「国民評議会」の創設準備を進めたが、オーストリア支配の諸地域に比べてその創設は遅れた。ハンガリー政府と協力し政権を担当していた議

会の最大勢力である「クロアチア人・セルビア人連合」がなお日和見主義の方針をとり、参加を見送っていたためである。だが、終戦の接近はザグレブの政治勢力に時間の猶予を許さなかった。

戦力を結集させたドイツは反攻に成功した。ドイツ軍はフランスの前線を突破し、一時はパリを射程距離に収めた。イタリア戦線のオーストリア＝ハンガリー軍も幾分か勝利を収めた。しかし、ドイツ軍は補給が続かなくなったため、6月には進撃を停止した。一方、アメリカの軍事力も加わった連合軍は7月に総反撃に転じ、8月には西部戦線におけるドイツ軍の優勢を覆した。連合軍は9月に南部戦線（サロニカ戦線）でも総攻撃に着手し、9月29日にブルガリアを降伏に追い込んだ。翌日、トルコも戦闘を停止した。中央同盟国側の敗北は決定的になった。10月4日、ドイツ首相マックスはアメリカ大統領ウィルソンに休戦を求めた。

10月5日、クロアチアおよびスロヴェニアの諸政党の代表は、帝国内の南スラヴ人解放運動のナショナルセンターとして「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会」を創設した。最後まで参加を躊躇していた「クロアチア人・セルビア人連合」も国民評議会指導部の説得によってその隊列に加わることを決めた。国民評議会は議長にスロヴェニア人のアントン・コロシエツ（スロヴェニア人民党）、副議長にはクロアチア人のアンテ・パヴェリッチ（スタルチェヴィッチ権利党）とセルビア人のスヴェトザール・プリビーチェヴィッチ（「クロアチア人・セルビア人連合」）を選出した<sup>15</sup>。

ウィーンの宮廷と政府は帝国の枠組みを維持するため、被支配民族に対して土壇場の譲歩にでた。10月1日、オーストリア首相ラマッシュは帝国内の人民に完全な同権と自決権を保障する用意があることを表明し、クロアチア人が求めていたボスニア、クロアチア、ダルマチアの統合に同意することを示唆した。10月16日、カール皇帝は「諸民族に対する布告」を発表した。その中で、皇帝はポーランド人地域の自決権とポーランド国家との統合を認めた上で、他の諸地域についても帝国の枠内で各民族が国家単



位を形成することを承認し、ハプスブルク帝国を連邦国家に再編する提案をおこなった。それは19世紀以来のスラヴ人の要求に応えることでハプスブルク王朝を存続させようとする企てであったが、遅きに失した。スラヴ人の指導者は帝国の枠組みの中にとどまる意思を失っていた。プラハのチェコ国民委員会はすでに独立政府のような行動をとり、南スラヴ人も独立の意思を固めていた<sup>16</sup>。

10月14日、パリのチェコスロヴァキア国民評議会はチェコスロヴァキア臨時政府の樹立を連合国に通告し、18日、ワシントンにいたマサリクはチェコスロヴァキアの独立声明を出し、翌19日、プラハのチェコ国民委員会はウィーンとの交渉を今後いっさい拒否することを表明した。ザグレブの国民評議会も10月19日、それが帝国内の南スラヴ人諸地域の最高政府機関であることを宣言した。以上は皇帝提案に対するスラヴ人側の拒絶回答を意味していた。同日、ザグレブの国民評議会は、コロシェツを団長とする3人（帝国議会の南スラヴ人議員が結成したユーゴスラヴィア・クラブのメンバー）を情報収集のため国外に送った。彼らはその途中ウィーンでオーストリア首相ラマッシュと会談し、皇帝提案の拒絶と独立の意思を伝えた。

10月25日、国民評議会幹部会は、「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの提案により、オーストリア＝ハンガリーからの独立の手続きを踏むために、クロアチア議会（サボル）を招集することを決めた。10月29日、プリビーチェヴィッチは、以下の国民評議会の決定を議会に提案し、出席した議員は満場一致でこれを採択した。(1)クロアチアの国会は、こんにちすべての交戦国が承認している民族自決の完全な権利に基づいて、次の決議を行う。すなわち、クロアチアおよびスラヴォニアの側と、ハンガリー王国およびオーストリア帝国との側に存在する、あらゆる既存の国家的・法制的な関係は解消される。したがって、とくにクロアチアとハンガリーの国家協定（ナゴドバ）は破棄され、無効となる。その後締結された補則や修正条項も同様である。そ

れゆえ、本日からダルマチア、クロアチアおよびスラヴォニアは、法的にも事実上もいかなる共通の国家業務をハンガリー王国とはもたない。(2)ダルマチア、クロアチア、スラヴォニアはリエーカとともに、オーストリアおよびハンガリーに対して独立を宣言し、それらは民族自決という近代的な原則、ならびにスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の民族的一体性にもとづいて、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の共通の主権国家に加わる。この国家は、これまでの国境線とは無関係にスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の民族的な全居住地域の上に成立する。(3)近い将来、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人が一体となって形成する立憲議会は、単純な多数決を排除して質的な多数決という手段を導入し、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の完全な同権という原則にもとづいて、事前にこの国家の政体および国家機構を最終的に決定する<sup>17</sup>。

このあとアンテ・パヴェリッチの提案により、議会は、10月19日の国民評議会の声明を承認し、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会」を最高政府機関とすることを認めた<sup>18</sup>。10月31日にはスロヴェニア議会、11月1日にはボスニア議会が同じ趣旨の決議を行った。この独立宣言に前後して帝国内の各民族は民族国家の創設を宣言し、オーストリア＝ハンガリー二重帝国は瓦解した<sup>19</sup>。

新しく誕生した「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」は、旧帝国内の南スラヴ人の全地域（クロアチア、スラヴォニア、ダルマチア、イストラ、リエーカ、トリエステ、スロヴェニア、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ、およびヴォイヴォディナ）をその内部に包含した。ザグレブの国民評議会幹部会は暫定的にあらゆる行政権を引き継いだ。外国との交渉、協定と条約の締結も国民評議会の権限となった。国民評議会はまた、ザグレブ、リュブリャーナ、サラエヴォ、スプリットに地方政府を設立した。

「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会」は独立政

府としての行動を始めたが、チェコスロヴァキア人やポーランド人の代表組織とは異なって、南スラヴ人の代表組織には連合国が承認を与えていなかった。したがって、チェコスロヴァキアやポーランドとは異なって、南スラヴ人の国家は独立を宣言したものの、その承認を確約されていなかった。それゆえ、国民評議会にとって最初の外交課題は、連合国の認知を得ることと来るべき休戦交渉の協議に参加することであった。10月31日、国民評議会は、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、セルビアの各国政府に対し「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の建国を通知し、この国家はさらにセルビアおよびモンテネグロと合同国家を形成する意思があることを伝えた。同時にロンドン在住のユーゴスラヴィア委員会代表のトルムビッチに対し、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の国益を代表して休戦交渉に加わる権限を与えることを決定した。

### 3 ジュネーブ会談とジュネーブ協定

トルムビッチら南スラヴ人亡命政治家たちは、ユーゴスラヴィア委員会の国際的承認を得るために独自の努力を重ねてきたが、連合国の陣営ではセルビアとイタリアがつねにこれに反対してきた<sup>20</sup>。しかし、1918年9月8日、内外で高まった民族自決主義の気運におされて、イタリア政府は南スラヴ人の統一国家の建国を支持する決定を正式に発表した。これでオーストリア=ハンガリーの戦後構想について、イギリス、フランス、アメリカ、イタリアの足並みはそろった。ところが、このことによって帝国内の南スラヴ人を代表する権利をもつのは誰なのかという問題が新たに浮上した。チェコスロヴァキア人やポーランド人の場合とは異なって、ハプスブルク帝国内の南スラヴ人の場合にはどのような集団を正式の代表組織と認めるのかを連合国指導者は決めかねていたからである。

連合国の一員であるセルビア政府は、オーストリア=ハンガリーの南ス

ラヴ人諸地域を代表する権利をもつ者はセルビア以外にはありえないと従来から主張していた。これに対して、トルムビッチらハブスブルク帝国内からの南スラヴ人亡命政治家は、マサリクのチェコスロヴァキア国民評議会に認めたのと同等の地位を、ユーゴスラヴィア委員会に認めるように連合政府に訴えていた。イタリア政府の決定のあと、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府はそれぞれ別個に自らをオーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人代表組織としての地位を公認するように連合に求めた。トルムビッチはセルビア政府がユーゴスラヴィア委員会の地位を認め、前年結ばれたコルフ協定に沿って外交政策で共同行動をとることを提案したが、セルビア首相のパシッチは同意しなかった。セルビア政府とユーゴスラヴィア委員会との間には歩み寄りの気運はまったくみられなかった。

ハブスブルク帝国内の南スラヴ人の代表権をめぐる両者が激しく争ったのは、その結果が南スラヴ人統一国家の形成のあり方を左右する重大問題であったからである。もしセルビアに代表権が認められた場合には、戦後に形成される統一国家は、セルビアが帝国内の南スラヴ人諸地域を吸収・併合して形成する国家になる。これは「拡大セルビア」に他ならない。将来の国家制度は、セルビア政府が中央政府を担い、他の諸地域を支配する中央集権的な形態をとることが予想される。しかし、セルビアとは別に南スラヴ人の代表組織が認められた場合には、戦後の統一国家は、帝国内南スラヴ人諸地域とセルビアとが対等に合併して形成される「合同国家」となる。将来の国家制度もセルビア政府によって一方的に決められものではなく、セルビア政府との交渉次第ではユーゴスラヴィア委員会がねらっていた連邦主義的な国家形態を導入することが可能になる。それゆえ、南スラヴ人の代表権は、セルビア政府とユーゴスラヴィア委員会にとってそれぞれ譲ることができない基本問題であった。

この問題に対する連合国内部の態度は分かれていた。イタリアはなおユーゴスラヴィア委員会の承認には反対であった。アメリカは中立的な立場をとっていたが、イギリスとフランスはユーゴスラヴィア委員会の承認

を認める方向に傾いていた<sup>21</sup>。ところが、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国民評議会」がザグレブで結成され、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の建国が宣言されたことで事情が大きく変わった。イギリスとフランスは、新しく出現したオーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人の代表組織とセルビア政府とが統一国家をめざして統一行動を起こすことを求めた。連合国はザグレブの国民評議会を政府として承認したわけではないが、少なくともセルビアが南スラヴ人諸地域を排他的に代表することには否定的な態度を示したのである。

このときセルビア首相のパシッチは、休戦条件の協議のため、代表団を率いてパリに滞在していた<sup>22</sup>。フランス大統領のポアンカレは、南スラヴ人の代表組織と早期に協議を始めるようパシッチに迫った<sup>23</sup>。11月2日、連合国の態度の変化に驚いたパシッチはコルフ島のセルビア政府にこう伝達している。「西欧の政治家はセルビアを南スラヴ人の国家とは異なった国だと考えている。彼らはセルビアの再建を確約しているが、同時にオーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人にも自決権があることを主張している」<sup>24</sup>。もっとも、事態は不都合なことばかりではなかった。むしろ、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の成立によって、南スラヴ人の統一国家に関して、ユーゴスラヴィア委員会とは別個の交渉主体が出現したのはパシッチにとって好都合なことでもあった。ザグレブの国民評議会を交渉相手とすることにより、トルムビッチらのユーゴスラヴィア委員会を無視することが可能となるからである。

ここで留意すべき点は、ユーゴスラヴィア委員会は、オーストリア＝ハンガリー内の政治指導者と直接の交流がこれまでほとんどなく、したがって、新しく出現したザグレブの国民評議会とも直接的な連携関係を確立していなかったことである<sup>25</sup>。この点は、第一次世界大戦の末期にチェコ人の亡命政治家が国内の政治指導者と連携を強めて、独立運動を成功に導いたこととは対照的である。オーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人政治指導者は、国外の情勢について正確な情報を欠いていた。連合国の政府関

係者の間では周知であったセルビア政府とユーゴスラヴィア委員会との争いについても、詳しくは彼らには伝わっていなかった。このような事情であったから、コロシェツを団長とするザグレブ国民評議会の代表団は、連合国の動向に関する情報収集にあたるため、外交関係者の情報交換の場であった中立国スイスに向かった。10月28日、彼らはジュネーブに到着した。彼らはユーゴスラヴィア委員会の現地代表に迎えられ、チェコスロヴァキアの亡命政治家とも意見を交換した。またセルビア政府関係者とも接触して、セルビア政府の政策やセルビアの経済事情を尋ねた。彼らの動きはただちにパリに伝えられ、パシッチはコロシェツらが事情に疎いことをつかんでいた<sup>26</sup>。

パリで同じ時期にパシッチは別の難題にあたっていた。それは政権を離脱したセルビアの野党との連立政権交渉であった。交渉は暗礁に乗り上げていた。その原因は、セルビアの野党がパシッチに対抗するためにトルムビッチらと連携する戦術をとっていたことである<sup>27</sup>。事態は急速に流動化しているので、もしパシッチがユーゴスラヴィア委員会の承認を先延ばしにするようならば、自分たちは委員会と共同行動をとると野党指導者はパシッチに迫った。窮地に立ったパシッチはザグレブの国民評議会を利用しようとした。彼は野党の代表にこう提案した。「まずオーストリア＝ハンガリーの同胞代表の意見を聞いてみようではないか。彼らは幹部会という委員会を作り、そのメンバーの一部はジュネーブに滞在している。彼らの意見を聞き、その上でユーゴスラヴィア委員会の承認の是非を判断しようではないか」。野党の代表もこれを受け入れた<sup>28</sup>。

パシッチは、ジュネーブのコロシェツに対して、南スラヴ人統一国家の創設に関わる問題を協議したいと提案した。コロシェツらはジュネーブでセルビア政府とユーゴスラヴィア委員会とが犬猿の仲であることを聞いて驚き、これを憂慮していた。彼らは双方の当事者に面会してその真意を確かめ、両者の関係を橋渡ししたいと考えていたので、パシッチの申し入れを受け入れた。こうしてセルビア政府代表とザグレブの政府代表との

話し合いが初めてもたれることになった。会議にはセルビア野党代表とトルムビッチらユーゴスラヴィア委員会の代表も招待された。

11月5日、パシッチとトルムビッチはジュネーブに到着した。コロシェッツはただちにトルムビッチと打ち合わせをする一方で、パシッチを表敬訪問した<sup>29</sup>。11月6日、協議は始まった<sup>30</sup>。会議は冒頭から紛糾した<sup>31</sup>。セルビアが対外的には全南スラヴ人を代表し、国民評議会を地方政府にすぎないと考えるパシッチと、セルビア政府と対等の立場で交渉しようとするコロシェッツの側とでは、話し合いの出発点が異なっていた。両者の議論はかみ合わなかった。一方、イギリスとフランス政府首脳は両者が一刻も早く協定を成立させることを望んでいることが会議の最中に電報で伝えられた<sup>32</sup>。結局、パシッチは折れた。国民評議会は旧オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人全地域を統治する合法的政府であることをセルビア政府は承認し、このことを連合国の各国政府に対して通知することに同意したのである<sup>33</sup>。これで協議は新しい段階に入った。統一国家の形成をめざして、「セルビア王国」と「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」という二つの国家の代表が交渉することになったのである。両者は統一国家の創設を合意し、11月9日に「ジュネーブ宣言」と呼ばれる共同声明を作成した<sup>34</sup>。

トルムビッチ、コロシェッツ、パシッチが連名で署名したこの声明によれば、新しい国家を代表するのは、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の合同政府」である。共通の国家の枠組みを前提としながら、セルビア王国とザグレブの国民評議会は当分の間、旧来の領土に関する施政権を引き継ぐ。普通・平等・直接・秘密の選挙によって選出された統一議会在が国家制度を最終的に決定する憲法を制定するまで、既存の行政制度は変更しない。合同政府は、外交、講和会議、軍事、安全保障、海軍の管理、交通、共通財務を担当する<sup>35</sup>。

ジュネーブで合意された協定は、旧ハプスブルク帝国内の南スラヴ人諸地域とセルビアとの対等な合体を想定した。統一国家の形成後もセルビア

王国と「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の併存を暫定的に認めた。この統一国家は、二つの国家に共通の枠組みを最小の事項に抑えている点で、二つの国家から構成される連合国家の形態にきわめて近い。合同政府も二つの国家が同数の閣僚を出すことによって構成されるので、セルビアの覇権は形式的に封じ込められた。トルムビッチは正式な外交機関が発足するまで国民評議会を対外的に代表することが認められていたが、このことをパシッチは追認した。これはユーゴスラヴィア委員会をセルビア政府が承認したことに等しいとトルムビッチらには映った。ユーゴスラヴィア委員会は、ジュネーブ協定の締結によってその目的を首尾よく達成し、その任務を終えたと考えた。だが、これは早計であった。

ジュネーブ協定が描いた新しい国家は、明らかにハプスブルク帝国の支配のもとでクロアチア人が宿願にしてきた連邦主義的な国家モデルに沿ったものであった。しかし、それはセルビアが多大な犠牲を払って求めてきた大セルビアの国家像とは大きくかけ離れていた。パシッチは、ジュネーブでの合意記録をただちに本国に伝えたが、コルフ島でパシッチに代わって政府を預かっていたストヤン・プロチッチはその内容に驚き、他の二人の閣僚とともに辞表を提出した<sup>36</sup>。プロチッチはこのとき、国内で国民評議会を指導するプリビーチェヴィッチのグループが、統一国家の国家制度について、セルビア政府と近い考えをもっていることを知っていた。そのため、プロチッチはパシッチに対して、トルムビッチやコロシェッツを相手にするのではなく、国民評議会の国内のメンバーを交渉の相手にすべきだと進言した<sup>37</sup>。パシッチもこれに同意した。11月12日、パリに戻ったパシッチはジュネーブ宣言の署名を撤回し、責任をとって内閣総辞職を表明した。

パシッチは、「全南スラヴ人の統一戦線を結成せよ」という連合国およびセルビア野党の要求に応える姿勢を示すために、ジュネーブでの会議を設定した。しかし、パシッチはこの会議で重要な取り決めをする意図をもっていなかった。彼が不本意な内容の合意文書の作成を強いられたのは、セ



ルビア政府から参加したのは彼一人という数の上での劣勢によるものであった。他のセルビア側代表は野党代表であり、彼にとっては政敵であった。トルムビッチはもちろん仇敵であった。ジュネーブ協定は彼が孤立無援のもとで作成された文書であった。しかし、パシッチが政府から要人を同行せず、ただ一人でジュネーブに来たということは、最初からこの会議に重要性を認めていなかったことを示していた。それゆえ、パシッチは、プロチッチの進言を受け入れ、あっさりとジュネーブ宣言の署名を撤回したのである<sup>38</sup>。

11月13日、トルムビッチとコロシェツツの一行もパリに到着した。彼らの目的は、ジュネーブで合意した新しい国家の承認を連合国から得ることであり、手始めにフランス政府を表敬訪問した。ところが、応対したフランス外相のピションは、ジュネーブ協定はセルビア政府によって否認されたこと、このことはパシッチ自身が出向いて自分に伝えたことを二人に明かした。それは彼らにとって青天の霹靂であった。11月14日、当惑したトルムビッチとコロシェツツはただちにパシッチに面会し、説明を求めた。パシッチは、本国政府と王位代行者のアレクサンダル皇太子がジュネーブの合意文書に裁可を与えなかったこと、そのため彼の内閣は総辞職したことを伝えた<sup>39</sup>。パシッチは合意事項を変更せざるを得ないと述べた。コロシェツツらは、フランス政府の立ち会いの下で、もう一度協議をやり直したいと述べた。

しかし、このあとザグレブのプリビーチェヴィッチの発言がセルビア軍の連絡将校をとおしてセルビア政府に伝わって、これは不可能になった。それは、コロシェツツらは本国の国民評議会を拘束するような協定を結ぶ権限を与えられていないというものであった。実際、プリビーチェヴィッチの発言は正しかった。コロシェツツらは正式にはザグレブ政府の全権代表ではなかったからである。彼らがザグレブを出発したときには、セルビア政府と国家統合について協議を行うことはまったく予定されていなかった。国民評議会は主として情報収集の目的でコロシェツツらの派遣を認め

ただけであった。それゆえ、ジュネーブでのコロシェッツらの行動は越権行為だと指摘されても仕方がなかった。

ジュネーブ宣言は署名後まもなく死文になった。このあと、統一国家の形成をめぐるやりとりは、国内に舞台を移し、ザグレブの国民評議会とベオグラードのセルビア政府との間でおこなわれることになる。なおこの会議の前に、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の運命に深刻な影響を及ぼした決定がパリで下されていた。

ジュネーブ会議が始まる直前の11月5日、オーストリア＝ハンガリーは連合国と正式に休戦したが、11月2日に合意された休戦協定には「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」に関係する重要な条件が含まれていた。それは、旧オーストリア＝ハンガリー海軍の艦船をイタリアに引き渡し、すべての将校と水兵を収監することを定めた条項である。ところが、10月30日にザグレブの国民評議会は、旧オーストリア＝ハンガリーの海軍を自国の軍隊として継承することを決定していた。将校と水兵の大半はクロアチア人であった。したがって、上述の休戦条件は、国民評議会にとっては自国の艦船をイタリアが没収し、兵士を戦闘不能にすることを意味したが、このような重要な条件が国民評議会の側が知ることも、異議を申し立てる機会もなく決定されたのである。ザグレブの国民評議会幹部会は10月31日にトルムビッチに対して国民評議会を代表して休戦交渉に参加することを命じていたが、間に合わなかった<sup>40</sup>。休戦交渉の連合国サイドにはセルビア政府の代表がいたが、彼は何の留保条件も付けずにこれを了承した<sup>41</sup>。

休戦協定が発効するやいなや、イタリアは、4月の「ローマ協定」を無視し、1915年に英仏露との間で結んだ参戦協定であるロンドン条約が領有を約束した領土ならびに軍事戦略上の要衝の占領に着手した。その主要な地域はイストラ半島沿岸部および東アドリア海の島嶼部、ダルマチア地方沿岸部である。それは、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」にとってはイタリアによる「侵略」の開始に他ならなかった。

#### 4 セルビア軍連絡将校シモヴィッチの到来

第一次世界大戦の末期、オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人諸地域の治安は日増しに悪化していた。帝国政府を悩ませたのは、第一に脱走兵の増加である。彼らの多くは森の中に逃げ込んだので、「緑の部隊」と呼ばれた。彼らは指導者をもたない未組織の集団であったが、その数は大きいところで数千人規模に膨れあがった。武装した脱走兵が潜伏し、徘徊する地域は各地に広がり、それはさながら政府の統制の及ばない解放区の様相を呈した。第二に、ロシア戦線から帰還した元捕虜たちが何よりも平和を求め、反政府的な態度をとったことである。一部にはボリシェヴィキの思想に染まり、社会革命を鼓舞する者もいた。兵役を続けた者も多くは兵舎を脱走したので、「緑の部隊」が拡大する結果を招いた。

戦争が終結に向かい、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊が決定的になると、不穏な動きは加速した。前線は崩壊し、オーストリア＝ハンガリー軍からは大量の脱走兵が発生した。彼らは一路、我が家をめざした。一方、一般民衆による暴動や略奪も頻発した。「緑の部隊」は都市部にも出現し、大地主、商人、官憲の建物の襲撃を始めた。他方、休戦協定の成立後には、隣国のイタリア軍が南スラヴ人の居住地域に進攻を始めた。問題であったのは、休戦協定が定めた進駐地域の境界線を越えてイタリアが軍隊を進めたことである。11月半ばにはイタリア軍はトリエステやイストラ地方の占領を完了し、続いてリエーカに上陸しようとしていた。別の部隊はスロヴェニアの中心都市リュブリャーナ近郊に達した。そこはもうザグレブからほど遠くない地点である。イタリア軍が侵攻した地域では住民が避難を始めていた。内外から迫る危機に新しい政府の指導部は狼狽した。

新政権の弱みは保有する軍事力の弱さであった。「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の成立後、彼らはオーストリア皇帝の承認を得て、帝国海軍の艦隊を新国家が継承することを宣言した。しかし、

パリで成立した休戦協定はこの艦隊をイタリアの管理下におくことを命じていた<sup>42</sup>。帝国陸軍については、新政権は幹部将校の忠誠を確保したが、末端の兵士の脱走を食い止めることができなかった。新政権は国民評議会の名で全脱走兵（「緑の部隊」）に対して兵舎または自宅に戻るよう命令を出したが、これに従う者はいなかった。兵舎では指揮官が部隊に総出動を命じても、その命令に応じる兵士はなく、ザグレブの司令部には「兵力をもたない將軍」がいるだけだと揶揄されるような有様になった<sup>43</sup>。このとき新政権の側が信頼を置いていた戦力は、ソコルと呼ばれた体育協会の会員と独立国家の誕生に熱狂した青年・学生から構成される民兵集団、プーラの元帝国海軍の水兵部隊、捕虜だったセルビア人兵士が結成した部隊、地方で結成された祖国防衛隊、急場しのぎに結成された志願兵の部隊がすべてであった<sup>44</sup>。これらの組織は明らかに装備や訓練の点で劣っていた。

内外から迫る危機に対処するために国民評議会の指導部が選択した行動は、セルビア王国に救援を求めることであった。ブルガリアの降伏後、連合国軍の先頭に立ってセルビア軍は本国に向けて進撃し、11月1日に首都ベオグラードを奪還した。11月4日、国民評議会幹部会はセルビア政府に代表団を派遣する動議を採択した。代表団の任務は、10月29日に採択された南スラヴ人国家の独立決議の通知、旧オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人地域の軍事のおよび政治的な情勢の報告、セルビア軍の派遣を第一とする国民評議会の要望の伝達、将来の統一政府の結成に向けた方針の協議であった。11月9日と10日に、国民評議会の代表団は、老齢のペータル国王に代わって摂政を務めていたアレクサンダル皇太子に謁見し、現下の危機的な状況を説明した<sup>45</sup>。アレクサンダル皇太子はセルビア軍の派遣を約束した。アレクサンダルの指示により、セルビア軍総司令部は、ドゥシャン・シモヴィッチ大佐にザグレブ政府に駐在する連絡将校の任務を与えた。

11月13日、シモヴィッチはザグレブに到着し、ただちにザグレブの国民評議会の幹部会員と面会した。彼は、アレクサンダル皇太子と政府の指示

によりセルビア軍は国内の治安の維持と国境の保全にあたる用意ができて  
いることを述べ、イタリア軍からリエーカを守るため歩兵大隊がすで  
に現地に向かっていることを伝えた。ついで幹部会員を代表してクロアチ  
ア議会の議長であったイワン・ロルコヴィッチが発言した。彼は、オース  
トリア＝ハンガリー帝国内の南スラヴ人諸地域を領土として「スロヴェニア  
人、クロアチア人、セルビア人の国家」が分離独立を果たした経緯を説明  
し、この国はセルビアおよびモンテネグロとは別個の国家であり、セル  
ビア政府の承認を得ていることを伝えた。ロルコヴィッチの発言を注意深  
く聞いていたシモヴィッチは次に発言した。ここで統一国家の中身や性格  
をめぐるセルビアとクロアチアの対立を予見する有名なやりとりが以下の  
ように始まったのである。

シモヴィッチはこう述べた。「自分は、この種の問題について貴方がた  
にいかなる発言をする権限もなく、またセルビア政府の意向も聞いていな  
い。しかし、一人の軍人として貴方がたにこう断言することはできる。セル  
ビアは、この戦争で50万人の犠牲を出し、ドナウ川、サヴェ川、ドリナ  
川の向こうにいる同胞民族の解放と統合のために戦ってきた。そのセルビ  
アがいかなる場合においても許すことができないのは、セルビアと国境を  
接して新しい国家が形成され、その国家が全同朋民族をその中に取り込  
んでしまうこと、および4年間の苦難に耐えて敵軍に完勝したあとで、後ろ  
に引き下がって、獲得した実り豊かな戦果のすべてをこの戦争で敵陣に加  
わっていた者に譲渡することである。戦争の勝者の権利として、セルビア  
の族長（ヴォイヴォジャ）ミシッチおよびサロニカ戦線の連合国軍総司令  
官フランシエ・デスペレー将軍が署名したハンガリーとの休戦協定に基づ  
いて、セルビアには以下の領土が帰属する。オルシャヴァーカランセベー  
シューマロシュ川ーアラドー下セゲンディアのライン以西のバナート、ホ  
ルゴーシュースポティツアーバヤのライン以南のバチカ、バタセクーベ  
チューーバルチュのラインおよびオシエクまでのドラヴァ川河畔のバ  
ラーニャ、オシエクージャコヴォーシャーマツの鉄道路線以東のスレム

およびスラヴォニア、全ボスニアおよびヘルツェゴヴィナ、プランカ岬までのダルマチア。以上の領土の外では、貴方がたはお好きなように方針を決めることができる。セルビアと一緒にしてもよいし、別個の国家を形成するのも結構である」<sup>46</sup>。

この年36歳になる中堅将校シモヴィッチは、驚くほど単刀直入にセルビア指導部の考えを語った<sup>47</sup>。一方、これまでセルビアの政府関係者や政治家と直接の関係をもたなかったザグレブの政治指導者は、本国のセルビア人から公式の場で話を聞くのは初めてであった。彼が明かしたセルビアの戦後の領土計画には「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」が領有を宣言した地域が含まれていた。シモヴィッチの発言を国民評議会の幹部会のメンバーがどの程度真に受けたのかは定かではないが、それはすべての出席者に対して心に残る強烈な印象を与えたことは間違いない。実際、「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者スヴェトザール・ブリビーチェヴィッチはこの翌日、シモヴィッチにそのように伝えている<sup>48</sup>。シモヴィッチの述べた言葉は歴史に残る発言となった。

しばらく沈黙が続いたあと、最初に口を開いたのは国民評議会副議長のアンテ・パヴェリッチである。彼はこう述べた。我々は皆、独立の南スラヴ人国家の形成を考えているのではなく、セルビアとの統合を望んでいる。しかし、ここで二つの問題が提起される。第一は国家制度である。我々は将来の共通国家が連邦制度をとることを望んでいる。その場合、個別の行政単位となるのは、セルビア、モンテネグロ、マケドニア、ボスニアおよびヘルツェゴヴィナ、ヴォイヴォディナ、クロアチア、ダルマチア、スロヴェニアである。第二はセルビア人とクロアチア人の居住地域の線引きである。セルビア人とクロアチア人は混住しているため、線引きの実行は難しい。これを線引きするためには、クロアチアおよび西ボスニアのセルビア人とヘルツェゴヴィナのクロアチア人の移住と交換を実行しなければならなくなる<sup>49</sup>。

パヴェリッチに対してシモヴィッチはこう答えた。「将来の国家制度の

選択は人民自らが決定する問題であり、人民の専権事項である。人民はこの権利を自由選挙によって選出された立憲議会、つまり国会議員を通して実現する。セルビア政府も貴方がたも、人民を抜きにし、彼らに審判を問うことなく、この問題をいま決定する権限をもたない。したがって、将来の国家制度の問題は我々がいま議論する必要はなく、適当な時期に人民自らが解決する問題として残しておく必要がある。現下の主要な問題は外部に対して国家をどのように形成するかである。すなわち、貴方がたが言うように、我々は皆、平和とより幸福な将来を人民に約束する強力・強大な統一国家の枠組みの中に入って行くのか、それとも二つないし三つの国家に分かれ、相互に領土争いをおこなってどんどん弱体化して行くのか<sup>50</sup>。以上の発言が示すように、シモヴィッチの考える統一国家像は、パヴェリッチの述べた連邦制国家とは異なり、明らかに中央集権的な単一国家を念頭に置いていた。

ただ、パヴェリッチが先の発言のなかでマケドニアをセルビアとは別の行政単位として列挙したことは、シモヴィッチにとっては、聞き捨てならない言葉だと映った。彼は続けてこう述べた。「セルビアをセルビアとマケドニアとに二分することについては、次のように言うことができるのみである。マケドニアの問題をセルビアは1912年と1913年の二度の先行する戦争で解決し、1914年にセルビアは不可分の単一国家としてこの戦争に加わった。だから新しい統一国家の国家制度がどのようになると、この戦争はそのような形でのみ終わることができる。セルビアは貴方がたの解放のために戦った。貴方がたに救いの手をさしのべ、同胞の共同体を解放した。貴方がたには、セルビアとマケドニアを引き裂く権利はまったくなく、そのようなことはいかなる意味でも公正ではない<sup>51</sup>。

その気迫に押されたパヴェリッチは、シモヴィッチの言うことにはおおむね同意できると述べ、統一国家の内部の分け方はあくまでたとえ話であり、セルビア国民の考えや感情に反するようなセルビアの分割を考えているわけでは決してないと弁明した<sup>52</sup>。国民評議会にとってセルビア軍は貴

重な援軍であり、連絡将校であるシモヴィッチの機嫌を損ねる意図はパヴェリッチには毛頭なかった。シモヴィッチも、セルビアとセルビアの王朝に対するスロヴェニア人やクロアチア人の支持を確保するため、彼らと協力するように上官から指示を受けていたので、国民評議会と不必要な争いを起こす気はなかったため、これ以上のやりとりはなかった。ただ、統一国家の樹立を目前に控えて、クロアチア人とセルビア人の国家像の違いが早くも表面化したことは留意されるべきであろう。

イタリア軍部隊の侵攻を食い止めるため、国民評議会はセルビア軍をスロヴェニアに至急派遣することを求めた。シモヴィッチはただちにこれをセルビア軍総司令部に伝え、国民評議会の意向をできるだけ満たして欲しいと申し添えた。この要請に応じてセルビア軍総司令部はベオグラードの歩兵大隊の移動を決定した。11月14日には、先発の歩兵大隊がザグレブ中央駅に到着し、国民評議会代表の歓迎を受けた。セルビアの部隊がサヴァ川を越えてザグレブに進駐するのは史上初めてのことであった。この部隊はイタリア軍を牽制するため、翌日リエーカに向けて出発した。セルビア軍はアドリア海沿岸部の都市スプリットとドブロヴニクにも部隊を派遣した。シモヴィッチは到着後、すぐさま国民評議会の動向を分析し、セルビア軍総司令部に報告した<sup>53</sup>。

議長のコロシェツが国外に滞在しているとき、ザグレブの国民評議会の運営は二人の副議長に委ねられていた。第一副議長はアンテ・パヴェリッチであり、第二副議長はスヴェトザール・プリビーチェヴィッチであった。プリビーチェヴィッチはナンバー・スリーの地位にあったが、辣腕の政治家として知られ、また何といても議会で絶対多数の議席をもつ「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者であったため、国民評議会に参加後すぐにその運営の実権を掌握した<sup>54</sup>。このプリビーチェヴィッチは、セルビア独立民族党の創設者の一人であり、クロアチア生まれのセルビア人であった<sup>55</sup>。

プリビーチェヴィッチは、セルビア政府が派遣した連絡将校のシモ



ヴィッチとただちに親密な関係を確立した。シモヴィッチは国民評議会の動向をセルビア政府に伝達する一方で、セルビア政府の意向をプリビーチェヴィッチに伝える役割を果たした。プリビーチェヴィッチは、このシモヴィッチを通して、セルビア軍司令部と摂政アレクサンダルと密接な連携をとった。またシモヴィッチを通して、プリビーチェヴィッチは、国外で何が進行しているか、ユーゴスラヴィア委員会、セルビア政府、国民評議会の代表が統一国家の形成の問題にどのような解決を与えようとしているのかを知ることができた。

クロアチアのセルビア人は、多数派のクロアチア人との対抗上、しばしばオーストリア＝ハンガリーによる分割統治に協力することによって、民族的な権益を維持・拡大してきた。結成時の指導者フラノ・スーピロが去った後、「クロアチア人・セルビア人連合」の指導権を握ったプリビーチェヴィッチもハンガリー政府と協力することで与党の地位を獲得し、クロアチアの議会政治を牛耳ってきた。オーストリア＝ハンガリーが崩壊した以上、クロアチアのセルビア人は権力の新たな後ろ盾を探さなければならなかった。プリビーチェヴィッチはこれをセルビア王国に求めた。彼自身を含めてクロアチアのセルビア人は、セルビア王国と一体化することによってのみ将来展望が開けるとみていたのである。その際、プリビーチェヴィッチの頭にあったセルビアとの統一国家像は、トルムビッチとユーゴスラヴィア委員会が描いた連邦制と地方分権主義を基軸とする国家像とは大きく異なっていた。それは大セルビア主義の国家像と同一視することはできないが、不可分の単一国家と中央集権制を柱にする点で、セルビア政府の考えに近かった。

プリビーチェヴィッチはその側近を国民評議会代表団のメンバーに選び、バオグラードに派遣することによって、その考えをアレクサンダル皇太子とセルビア政府に伝えていた。それゆえ、これを承知していたパシッチ側近のプロチッチは、トルムビッチとコロシェツに代えて、プリビーチェヴィッチのグループを国家統合の交渉相手にすべきだと進言したので

ある。このような考えであったから、プリビーチェヴィッチは、シモヴィッチを通して伝えられるセルビア政府の意向に呼応して、セルビア王国と「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」との直接的な国家統合を急いだ。したがって、彼は、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」とセルビア王国とが暫定的に併存することを想定するジュネーブ協定の国家連合的な構想には断固反対であった。セルビア人が二つの国家に分断されてしまうからである。

プリビーチェヴィッチは、ジュネーブのコロシェッツから電報を受け取り、またシモヴィッチからジュネーブ会議の合意内容やその後のセルビア政府の危機を聞いていたが、それを国民評議会のメンバーに知らせなかった。それゆえ、ジュネーブ会議の合意内容はザグレブでは公式に発表されなかったし、国民評議会の議論の俎上にも取り上げられなかった。ジュネーブで会議があり、セルビア政府と国民評議会の代表団が国家統合について共同宣言を出したことは新聞が伝えただけであった。11月20日にプリビーチェヴィッチはこの報道に基づいてジュネーブでの出来事を国民評議会幹部会の会議で取り上げ、コロシェッツらは国民評議会を代表して連合国と協定を結ぶ権限を与えられていないと述べたのである。会議にオブザーバーとして出席していたシモヴィッチはこのことをただちにセルビア政府に伝えた。その結果、パリのコロシェッツとトルムビッチは交渉上の立場を失い、ジュネーブ宣言は最終的に葬り去られた<sup>56</sup>。

## 5 ザグレブ国民評議会の決断と統一国家の誕生

イタリア軍の脅威にさらされていたダルマチアの地方政府は、セルビアとの統合を一刻も早く実現することを国民評議会に求めていた。11月14日、国民評議会幹部会は、ダルマチア政府の要請を検討し、合同政府の形成に向けてセルビア政府とできるだけ早く協議に入ることを決議した。しかし、この日の会議にはプリビーチェヴィッチが欠席していた。会議に出

席していた幹部会のメンバーは、ダルマチア政府が抱いていたほどさし迫った危機感を感じていなかった<sup>57</sup>。それゆえ、セルビア政府との協議に入るのは、ユーゴスラヴィア委員会の情勢報告を聞いてからにしようと彼らは結論づけた。これに業を煮やしたダルマチア政府は、11月16日、最後通牒を国民評議会に突き付けた。「5日以内にセルビアとの統合を国民評議会中央委員会が決議しないならば、ダルマチア政府は自らセルビアとの統合を宣言する」。

11月20日、国民評議会幹部会は、国民評議会の中央委員会総会をただちに招集し、ダルマチア政府の提案を審議すること、国外のコロシェツとトルムビッチをただちに呼び寄せるか、それができない場合には代理の人物の派遣を求めることを決定した。コロシェツらは国民評議会を代表して連合国と協定を結ぶ権限を与えられていないとプリビーチェヴィッチが述べ、国民評議会がこれを確認したのはこの日のことである。プリビーチェヴィッチは、セルビア王国との関係が確立していないことは国民評議会の弱点であると述べ、次回の総会にはセルビア側から誰かを派遣してもらうことをセルビア政府に要請することを提案した。この提案は採択され、この要請に応じて、摂政アレクサンダルの側近のモムチロ・ニンッチがベオグラードから来訪することになった。

11月23日の国民評議会の総会には、クロアチア、ダルマチア、ボスニア、スロヴェニアなど「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人」の国家を構成する地域の代表が集まった。総会は、プリビーチェヴィッチの演説で始まった。彼は新政府をめぐる内外の情勢の緊迫化を強調し、セルビアとの統合を早急におこなう必要性を訴えた。続いてベオグラードから招待されたニンッチが発言に立ち、ジュネーブ協定を指して、国外では国民評議会の代表およびユーゴスラヴィア委員会、セルビア政府との間で合意が成立したことに触れ、国民評議会も統一国家の形成に向けての作業を急いでほしいと述べた。このあと総会は、ダルマチア政府の提案を含めて、統合の手順についていくつかのグループから提出された提案の審議に入っ

た<sup>58</sup>。会議の参加者はセルビア政府と統合交渉を開始すべきだという点では合意があったが、この統合を、いつ、どのようにおこなうかについては大きく意見が分かれた。

議論の一つの流れを形成したのは統合推進の急先鋒であったダルマチア地方政府代表の主張である。それは、クロアチアは内外から存亡の危機にさらされているので、統一国家の形成を急がなければならない、そのために国民評議会のメンバーはベオグラードに行ってセルビア政府と統合交渉をただちに開始すべきである、新国家の政体（君主制か共和制か）や政治・行政機構のあり方は民主的な総選挙を行った上で召集される立憲議会が決定すればよいというものであった。多数派を占めるプリビーチェヴィッチのグループ（「クロアチア人・セルビア人連合」）はダルマチア政府の提案を支持し、ボスニア政府の代表もこれに同調した。ダルマチア沿岸と同様に、スロヴェニアもイタリア軍侵攻の矢面にさらされており、その一部の地域はロンドン条約によりイタリアが割譲を要求していた。それゆえ、スロヴェニアの代表は、ダルマチア政府の提案を支持した<sup>59</sup>。

これに対して、新国家の政体や政治・行政機構のあり方を最初に明確にすべきだと主張したのがクロアチア大衆農民党の指導者ステェパン・ラディッチである。彼は、これまでクロアチアが培った歴史的民族的な独自性とそれぞれの国家の自立性を維持するためには、統一国家は連邦制の原則のもとに建国するのがもっとも適切であると述べた。具体的には、新国家はセルビア国王、クロアチア総督、スロヴェニア国民評議会議長の三者を共同元首とし、スロヴェニア、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、ダルマチア、ヴォイヴォディナを自治単位とする連邦国家とすることを提案した<sup>60</sup>。

しかし、連邦制国家の提案に対しては、これではセルビア人が別々の国家に分断されてしまうという理由から、セルビア民族急進党のジャルコ・ミラディノヴィッチが激しい口調で反対した。彼はこう述べた。クロアチア人が連邦制の原則を採用するなら、スレム、バチカ、バナートといった

セルビア人居住地域がセルビアと直接合併することを我々は求める。このあと「クロアチア人・セルビア人連合」のイワン・リバールは、セルビアが覇権を握ることよりも外国の侵略のほうがもっと恐ろしいと述べ、現在の我々は（武力が）ゼロに等しいのだから頭に屋根（＝強力な国家の枠組み）が必要だと強調した<sup>61</sup>。

スタルチェヴィッチ権利党の党首のアンテ・パヴェリッチは、ユーゴスラヴィア委員会とまず話し合いを行うべきであって、これを抜きには何もできないと述べた。彼はいかに治安情勢が緊迫しているとしても、これほど重大な決定を短兵急に行うべきではないと強調した。彼はまた「クロアチア人・セルビア人連合」は少し前まで日和見主義的な方針に固執していたのに、いまや過度に急進的になっていると揶揄した。パヴェリッチはミラディノヴィッチが示した分離主義を国民評議会の結成の精神に反すると厳しく批判し、もしそのような解決策がとられるなら、自分は国民評議会副議長を辞任することを示唆した<sup>62</sup>。

議論は一日では決着せず、翌日の会議に持ち越された。紛糾する議論を収束の方向に向かわせたのはダルマチア政府代表のヨシプ・スモドラカである。スモドラカは、これ以上議論を続けても争点が広がるだけであると述べ、統合交渉を先送りしないためにも結論を出すことを求めた。そのために彼は、幹部会のメンバーから7人のメンバーを選んで作業委員会をつくり、この委員会がこれまで提出されているすべての提案を一本の案にまとめ、これを総会のメンバーが無記名投票で採決することを提案した。この提案は採択された。7人の委員はただちに一本化作業を開始し、その日の夕方の会議に次のような提案を提示した。それは、国民評議会のメンバーから28人の代表を選び、彼らをセルビアの首都ベオグラードに派遣して、セルビア政府、セルビアおよびモンテネグロの全政党の代表と協議して、国家統合をただちに実行に移すというものである。その際の交渉にあたって守られるべき基本方針も提案された。

この基本方針は以下のようなものであった。(1)新しい統一国家の最終的

な組織は、普通選挙によって選出された立憲議会において、3分の2以上の賛成票によって決定される。この議会は和平協定が成立後、6ヶ月以内に召集される。具体的には、立憲議会は、憲法、国家の政体（君主制か共和制か）、内部的な国家制度、国民の基本的権利、国旗、政府ならびにその他の国家機構の所在地を決定する。(2)立憲議会が召集されるまでの間、国家評議会が暫定的に立法権を行使する。この国家評議会には、ザグレブの国民評議会の全メンバーおよび5人のユーゴスラヴィア委員会のメンバー、セルビアおよびモンテネグロの議会が指名する一定人数の代表から構成される。(3)国家評議会は最初の会議で国旗と海洋旗を暫定的に定める。(4)立憲議会が議決するまで、国家元首の地位はセルビア国王ないしはその摂政のアレクサンダルが遂行する。彼は、国家評議会のメンバーの前で宣誓し、議院内閣制の原則に従って国家評議会のメンバーから政府閣僚を任命する。彼は法律の提案権と裁可権をもつ。国家評議会はその決議により延会できるが、立憲議会が開催されるまで解散できない。(5)政府ならびに国家評議会の暫定的な所在地は話し合いで決める。(6)国家評議会は憲法制制定議会選挙を公示し、施行する。選挙の実施後はただちに議会を召集する。選挙は普通・直接・秘密投票で実施し、得票率に応じて政党に議席数を割り振る。(7)政府は国家評議会に責任を負い、国政を遂行する。この政府は、首相、各行政分野の閣僚、7名の地域代表（セルビア、クロアチア・スラヴォニア、スロヴェニア、ダルマチア、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ）から構成される。(8)政府は、外交、軍事、財政、郵便・電信を担当し、その他の行政は地方政府が担当する。(9)地方の自治に委ねられた行政事項は各地域の議会が監督する。地方政府には首長をおき、ザグレブでは総督（バン）がこれを担当する。(10)政府は、国家財政の枠組み内で必要な財政手段を地方政府に割り当てる。(11)経過期間においては、これまでの法律・法令、行政・司法制度、地方政府機関はすべて有効とする<sup>63</sup>。

再開された会議において、ステェパン・ラディッチは、7人委員会の提案に真っ向から反対した。彼は、セルビアおよびモンテネグロとの国家統

合は連邦制の原則によって行うべきであると持論を述べた。ラディッチによれば、セルビア側も承認している10月29日のクロアチア議会決議（「独立宣言」）は、来るべき立憲議会は統一国家の政体と内部的な組織を単純な多数決によって決定しないことを明確に述べており、3分の2の議決で決定するという7人委員会の提案はこれに反している。もしこれを採択しようとするなら、議会をもう一度開いて提案の是非を審議すべきだと彼は述べた。何人かがラディッチの意見に賛成を表明したが、総会のメンバーの大勢はこれに反対であった。たとえば、バラッツは、クロアチア議会は国民評議会に権力を委任したのだから、改めて議会の批准を求める必要はないと述べた。

結局、採決の結果、7人委員会の提案は採択された。この提案に反対票を投じた中央委員会のメンバーはステパン・ラディッチだけであった<sup>64</sup>。彼は、採決の前に再び演説に立ち、新しい国家におけるクロアチアの地位が確定しない限りでは、セルビアとの国家統合についていかなる結論も出すべきではないと述べた。このときラディッチが残した有名な発言によれば、セルビア王国側の正式な統合条件がまったく示されていないのにセルビアとの国家統合を決めることは、ガチョウがやみくもに霧の中に飛び込んでいくことと同じであり、けっしてすべきではない。このように彼は中央委員会のメンバーにあまりに結論を急ぎすぎていることを重ねて警告したが、それは聞き入れられなかった。

11月26日、国民評議会中央委員会は再び招集され、いつ代表団をベオグラードに派遣するのかを審議した。一部のメンバーは特別列車をチャーターして翌日すぐに出発すべきだと提案した。別のメンバーはこれに反対した。反対者の一人のバラッツは、いまベオグラードに行ってもセルビア政府の要人も議会のメンバーもまだ全員帰国していないし、しかも国民評議会は国外の動向についてユーゴスラヴィア委員会から何の報告も受けていない、したがって、やはりしばらく時間を置くべきだと述べた。これに対して、実力者のプリビーチェヴィッチの意見はこうだった。かりにセル

ビア政府の要人や議会のメンバーがそろっていないとしても、彼らは近日中に帰国することが確実である。それに国民評議会のメンバーの多くがただちに出発することを望んでいるならば、これを遅らす理由はないだろう。プリビーチェヴィチはこう述べて、ただちにベオグラードに出発する案を支持した。

結局、国民評議会代表団の出発日は異例の形で決定された。これはプリビーチェヴィチの機転であった。午後10時をすぎても堂々めぐりの議論が続いていたが、多くのメンバーは、翌日にベオグラードに出発することはもうないだろうと思って帰宅を始めていた。しかし、そのような結論はできていなかった。最後まで残っていたプリビーチェヴィチを中心とするグループは、議会の小会議室に集まった。そして、プリビーチェヴィチのイニシアチブのもとに、翌日の9時に特別列車でベオグラードに向けて代表団が出発することを決定した。このあと、すでに帰宅していた代表団のメンバーの自宅には伝令の者が派遣され、翌日ザグレブ中央駅に集合するように伝えた。一部のメンバーだけでこのような決定が成立するのか疑わしかったが、帰宅したメンバーには採決を確認することができなかったのである。こうして、プリビーチェヴィチは代表団の即時派遣を決定することに成功した<sup>65</sup>。

ザグレブで国民評議会の中央委員会総会が開催されていたとき、ヴォイヴォディナとモンテネグロの地位に大きな変化があった。それぞれの議会は独自にセルビアとの統合を決議したのである。

ヴォイヴォディナは、クロアチアやスラヴォニアと同様にハンガリーに所属していた南スラヴ人の地域であり、それゆえ、オーストリア＝ハンガリー解体の際には「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」に加わった。ヴォイヴォディナの人口は多様な民族構成であったが、セルビア人がもっとも多く、次いでクロアチア人が多かった。当初、同地域のセルビア人とクロアチア人は協力関係にあり、ザグレブの国民評議会とも密接な連絡を取っていた。ところが、ハンガリーと連合国の間で休戦協定



が成立し、これに伴って、11月半ばにセルビア軍がヴォイヴォディナの中心地ノヴィ・サドに進駐してから情勢が変わった。セルビア軍総司令部は活動家を派遣して現地のセルビア人に様々な方法で働きかけ、セルビアとの直接合併の気運を促した。この結果、ヴォイヴォディナの政治勢力は二つに分裂した。クロアチア人と一部のセルビア人はザグレブの国民評議会と行動を共にし、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」の一員としてセルビアとの国家統合に参加しようと考えていた。これに対して、セルビア人の大半はセルビアとの直接的な統合の実施を支持していた。総選挙が実施され、セルビア人が圧倒的多数の議席を獲得した<sup>66</sup>。これを受けて、11月25日に開かれた議会は、ザグレブの国民評議会の決定を待つことなく、ヴォイヴォディナをただちにセルビア王国に統合することを決議した<sup>67</sup>。

モンテネグロは1916年初めにオーストリア＝ハンガリー軍に占領され、ニコラ国王と政府はフランスに亡命していた。1918年10月末にセルビア軍が到着し、その影響下に「セルビアとモンテネグロの統合のための実行委員会」が設立された。モンテネグロ人は宗教（正教）を同じくするセルビア人に対する親近感が強く、大半はセルビアとの統合を支持していたが、一部に国王の帰国を望み、独立国家を維持しようとする勢力があった。総選挙が実施され、セルビアとの直接統合を求める勢力が圧勝した。この結果、11月26日に開かれた議会は、ニコラ国王とその王朝を廃位し、モンテネグロをセルビア王国に合併させることを決議した<sup>68</sup>。こうして、セルビアは隣接する地域の併合をまたたく間に進め、あとはザグレブの国民評議会との統合交渉を残すだけになった。

11月28日、国民評議会の代表団はベオグラードに到着した。同日プリビーチェヴィッチは国外にいる首相パシッチに代わってセルビア政府を代表するストヤン・プロチッチを訪ね、翌日には摂政アレクサンドルと謁見した。この会談の席上、アレクサンドルは国家統合のセレモニーをすぐにおこないたいと述べ、プリビーチェヴィッチもこれを了承した。

国民評議会の代表団の目的は、セルビア政府および議会の代表と国家統合の交渉をすることであった。ところが、予期されたことであったが、セルビア議会の議員の大半はまだ帰国していなかった。したがって、国家統合に関する本交渉はおこなわれず、アレクサンダルの意向に沿って、国家統合のセレモニーを先行しておこなうことになった。セルビア側から国民会議の代表団との話し合いに応じたのはプロチッチだけであった。プロチッチは、国民評議会の代表団が提示した「基本方針」をみたとき、好意的な態度を示さなかった。とくに、その第1項が共和制導入の可能性を残していることには頑強に修正を求めた。代表団のメンバーは、他の条項からみてカラジョルジェヴィッチ王朝の存在は前提とされていると述べたが、プロチッチはこの解釈を受け入れなかったので、代表団は妥協策を講じることになった。国家統合セレモニーでは、国民評議会の代表団の代表がアレクサンダルに対してセルビアとの国家統合を求める声明文を読み上げ、これをアレクサンダルが受諾し、統一国家の樹立を宣言することが予定されていた。この声明文の中で、統一国家をカラジョルジェヴィッチ王朝のもとに置くことを求めることにしたのである。

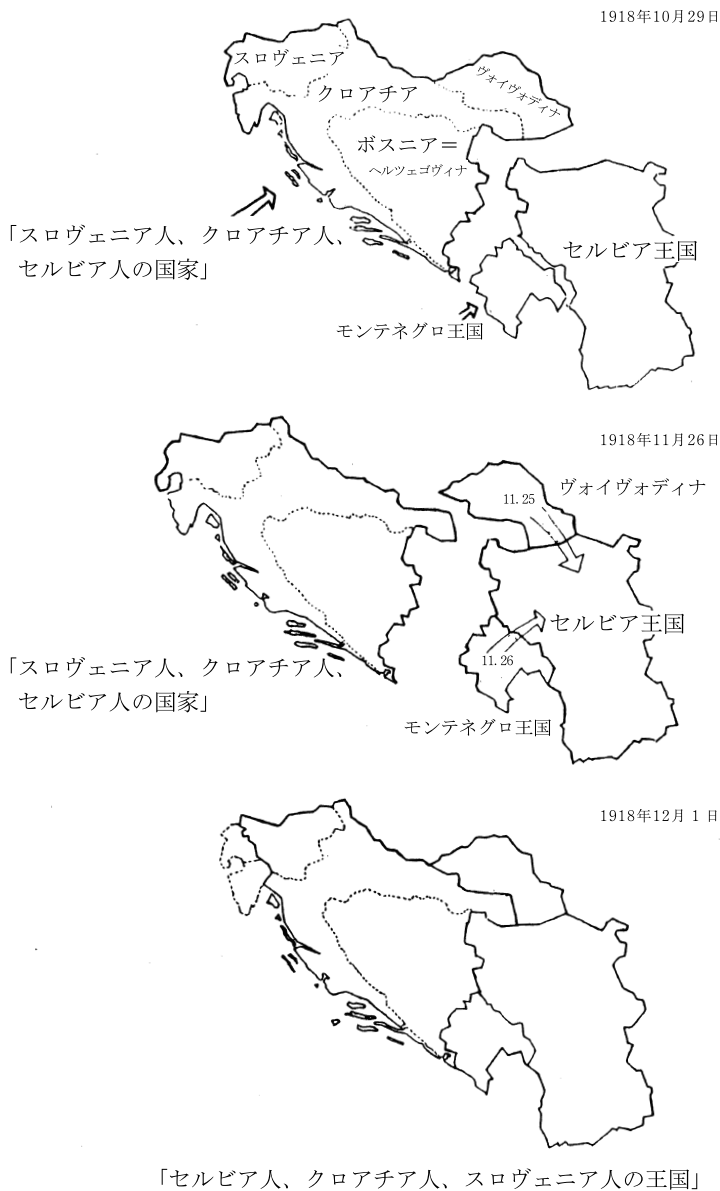
国民評議会の代表団は声明文を用意することになった。5人のメンバーが選ばれ、テキストの作成に着手した。ところが、テキストの作成に当たって、プリビーチェヴィチとパヴェリッチとの間で対立が起こった。パヴェリッチは、立憲議会が国家の組織を最終的に決めるまでは、それぞれの国家の独自性、とくにその歴史的な境界と自治権を尊重し、地方政府の自治権限を承認するという文言を、国民評議会代表団の声明文とこれに対するアレクサンダルの答礼文の中に入れることを求めた。パヴェリッチのねらいは、少なくとも過渡期においては統一国家を国家連合の形態にとどめておくことにあった。しかし、プリビーチェヴィチはこれに反対した。まず、「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」とセルビア王国との統合を実行することが先決であり、その他のすべての問題は後の協議で解決すべきだと彼は主張した。これに対して、パヴェリッチは、国民

評議会が採択した「基本方針」に沿って声明文を起草する必要があると主張したが、プリビーチェヴィチは、あの「基本方針」は要望を述べたものであって絶対条件ではないと反論した。プリビーチェヴィチは、ここで国家制度の議論を持ち出すと統合の手続きが遅れてしまうと述べて譲らなかった。最後にスモドラカの仲裁で妥協がはかられ、声明文の中には新政府の監督の下にこれまでの自治的な行政機構が継続することが要望として述べられるだけになった<sup>69</sup>。

パヴェリッチと他のスタルチェヴィチ権利党のメンバーが最後まで抵抗しなかったことには、ユーゴスラヴィア委員会からの電報も影響していた。それは「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」が国際的に困難な状況にあり、統合を急ぐべきだと述べていた。こうして、スヴェトザール・プリビーチェヴィチは、歴史的な境界を尊重すべきだという原則を声明文に明記しないことに成功した。これは単一国家の形成の第一歩であった<sup>70</sup>。

12月1日の夕刻、国家統合のセレモニーが摂政アレクサンダルの私邸で簡素におこなわれた。本来、このように重大な国家行事は王宮で開催される場所であるが、王宮は戦争で破壊されて、まだ使用できる状態ではなかったからである。セルビア王国側の主要な出席者は、首相代行のストヤン・プロチッチ、アレクサンダル側近のモムチロ・ニンチッチおよびジヴォイノ・ミシッチ、内務相リュバ・ヨヴァノヴィッチであり、首相のパシッチも野党の代表もまだ帰国していなかった。アレクサンダルの私邸の大広間には国民評議会代表団のメンバーが立ちつくした。彼らを代表してパヴェリッチは、アレクサンダルに対して、セルビアとの国家統合を求める声明文を読み上げた。アレクサンダルはこの要請を受諾し、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の建国を宣言した<sup>71</sup>。

図1 1918年の南スラヴ人国家の統合過程



## 6 セルビアとの国家統合の問題点

19世紀後半のクロアチアの政治指導者であり、南スラヴ統一主義の主導者であったヨシプ・シュトロスマイエルは、南スラヴ人の統一国家は次の三段階を経て形成されると想定した。第一段階は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の内部で、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の政治単位を形成する。これはスロヴェニア、クロアチア、ヴォイヴォディナを自治単位として確立するということである。第二段階は、帝国内部の南スラヴ人の政治単位を統合し、オーストリアやハンガリーと対等・同権の第三の国家を形成することである。これはハプスブルク帝国を三重王国に再編することを意味する。第三段階は、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊後に、旧帝国内の南スラヴ人国家と、他の南スラヴ人の諸国家とが対等・同権の原則で合同国家を形成する。つまり、連邦国家としてのユーゴスラヴィアを形成することである。

シュトロスマイエルがこのような考えを定式化した1870年代には、南スラヴ人の統一国家は一種のユートピアにすぎなかったから、彼が生きていれば「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の樹立は感慨深いものがあっただろう。だが、南スラヴ人の統一国家の実現は、いくつかの点でシュトロスマイエルが描いたシナリオとは違った過程をたどった。第一に、ハプスブルク帝国内のスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人は第一次世界大戦末期に国民評議会を結成し、南スラヴ人の諸地域は初めて政治単位としてまとまったが、それは帝国内の国家的構成要素になることはなかった。ハプスブルク帝国は連邦制国家に再編されることなく崩壊し、帝国内の南スラヴ人の居住地域は「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の国家」としていきなり独立国家の道を歩むことになった。第二に、1918年12月に統一宣言がなされた南スラヴ人国家は連邦制国家ではなかった。これに対して、その前月にコロシェツ、トルムビッチら国民評議会代表と、セルビア政府首相のパシッチおよびセルビア野党代